

雨と古蹟とドラムリン—アイルランドの旅・抄

堀 淳一*

1 スライゴーからロスコモンへ

スライゴーの駅前を出たバスは、ボイルへ向かう国道N 4号を、まっしぐらに走っていった。

アイルランドのバスの走りっぷりの豪快さにはもう慣れっこになっていたつもりだったが、このバスのまるで狂ったような猛スピードには、今更ながら胆を冷やした。運転士はほとんどが60歳以上の年輩(あちらの男は一般に老けて見えるから、実際はせいぜい50歳台だったのかもしれないが)だが、この日も頭のすっかり禿げた「おじいちゃん」だった。客あしらいは実にものやわらかで、乗る時に私が「ロスコモンまで」というと、「じゃ、荷物はうしろに入れた方がいいですね」と、わざわざ降りてきて後尾の荷物室へ運んでいってくれたのだが、そのときのニコニコと柔軟な顔は、全く孫をあやす好々爺、という感じだったのだ。ところが、いったん発車すると、とたんに暴走族にヘンシンしたかと思うほどにブッ飛ばすのである。アイルランドの道路は、どんな辺鄙な田舎に行っても砂利道におめにかかることはまずない、というぐらいたい舗装がゆき届いているけれども、舗装の質となると概ねよくなく、路面はザラザラと粗いし、ツギハギ舗装も多い。あれではさぞタイヤの減りが早いだろうな、と思わせる。(もっとも、日本のように強迫神經症的に鏡のようになめらかな舗装をみがき上げてクルマ様を大切にお取り扱い申しあげ、イヤよりも路面のほうを早く減らし、その補修にまた税金を使っていよいよクルマ様を甘やかし、のさばらせるのとどちらがよいか、にわかには断じがたいであろう。)それに道路幅員も、国道でもほとんどが2車線だから、決して高速運転にとって条件がいいわけではない。にもかかわらず、大型バスが乗用車を手当たり次第追いぬいていったのだから恐れ入る。路面に凹凸のあ

るところでは、そのまま空中に飛び上がりはしないかと思われるほどに派手にバウンドするので、ハラハラのしっ放しだったし、そうでなくても荷物室のスーツケースがさぞや七転八倒していることだろう、鍵がこわれて中味がバラ撒かれはしないか、と、気が気ではなかった。

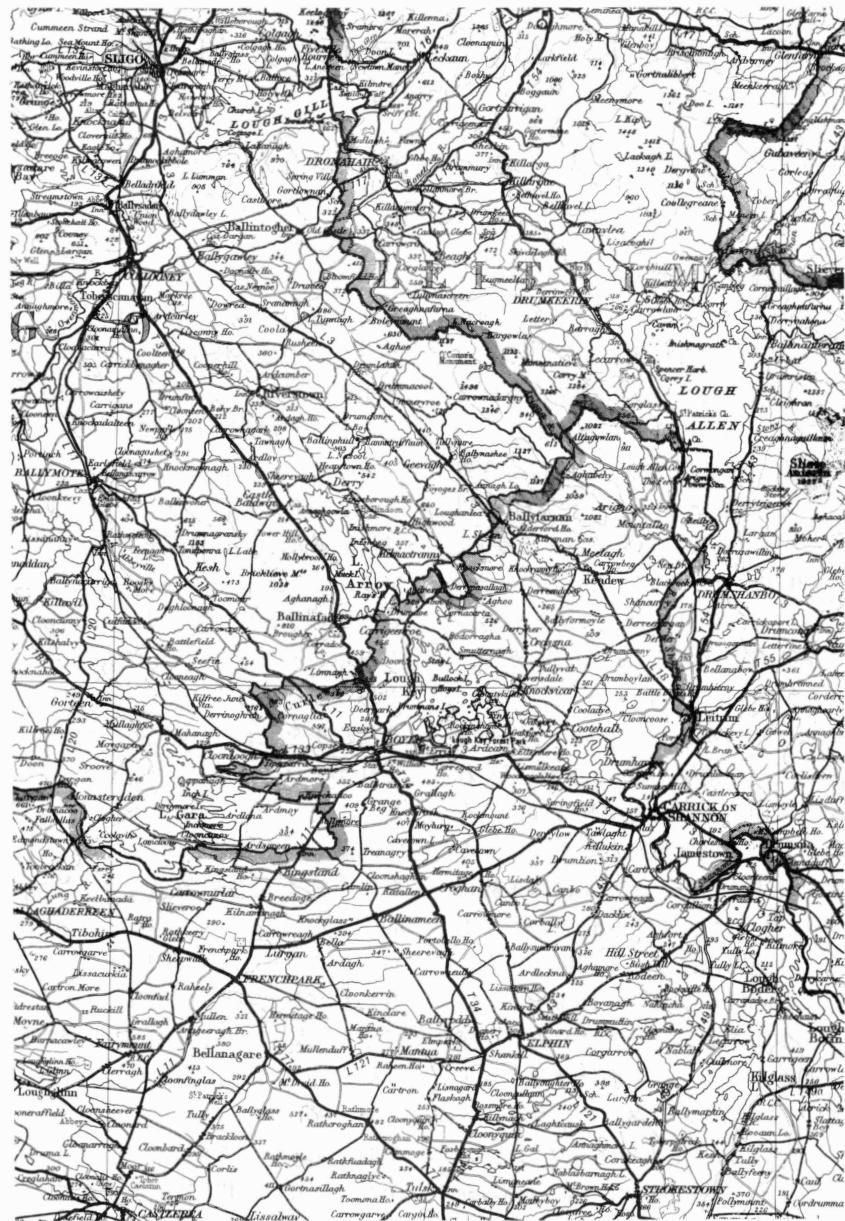
おじいちゃんは、しかし、涼しい顔でこともなげに、暴走族的運転を続ける。どころか、このじいさん、カセットマニアなのか、乗用車を1台ぬいたと思うと片手をハンドルから離してあっちでもないこっちでもない、とカセットを入れかえる。と思うと猛然と次のクルマを追い越す。と思うとまた片手を離して——と、何ともめまぐるしい。それがまたいっそう、私をハラハラさせるのだった。

閑話、いや躁話休題。這うようになだらかな丘なみを遠く左右に望みながら寥々とした曠野を30分もこうしてつっ走ったあと、バスはようやくわずかにスピードを落として、アイルランドには珍しくガキガキとした岩のピーク(氷蝕によってできたものであろうか?)で眼を惹くブリックリーヴ山の東側山裾を登っていった。左手にロー・アロウ(アロウ湖)のはろやかに光る白い水面を見下ろしながら。そして、ふたたび下りにかかるてその湖畔をかすめたと思うと、今度はカーリュー山を横断する峠越えにかかる(といつてもたった100メートル前後の、しかもゆるやかな峠にすぎないが)。この峠を下り切ったところがボイルであった。

ボイルには有名なシトー派の修道院の跡があるので、それは車窓からちょっと見るだけにして、私はさらに乗り続けた。

ボイルの町をつらぬくボイル川は、町の東方からシャノン川に合流するまでの15キロの間、水をよどませ、蛇行また蛇行を重ねるばかりでなく、ロー・キイ(キイ湖)、オークポート湖、ドラムハ—

* 地図研究家



地図1 253440分の1「Dublin-Roscommon」

ロウ湖と水をひろげて、一大水郷をつくっている。そして水面の両側はいちめんの湿原。バスはそれを避けてその南縁の丘陵地をゆくが、ドラムハーロウ湖の岸は、折りおりかすめる。だが、車窓から見るその水ぎわは、どうやら本来の湖岸ではないようであった。水は樹々の根もとをひたし、叢の頭だけを水面からのぞかせていたのである。まるで湿原全体が水に溺れてアップアップしているかのような光景——そういえば、さっき曠野をひ

た走っていた時にも、メドウの低所に水がたまつて沼のようになっているのを、しばしば見かけた。この年（1985）はただでさえ多いアイルランドの雨が異常に多く、そのため穀物の収穫がほとんどゼロだったという話をあちこちできていたのだが、これらの風景はその多雨水害のすさまじさを、さまざまと肌にせまらせるのであった。

国道N4号はキャリック・オン・シャノンでアイルランド随一大河シャノン川を渡るが、バス

はそのすぐ手前まで行ってはるばると光る湖のように広い水面と林立するヨットのマストの大群に川の広さをチラッとうかがわせただけで、渡らずに南西にそれ、エルフィンへと向かう。風景は一転して、牧草をゆたかに載せてなだらかに波打つ丘陵地帯のそれと変わり、湿原の中では珍しく姿を消していたヘッジロウが、ふたたび現れた。

ヘッジに区切られた美しいメドウやその中の樹叢や木立ち、そしてあるいはひなびた、あるいは清楚な家々に眼をたのしませながら、狭い道を両側のヘッジの叢をかき分けるように曲折上下していたバスが、そんな道にもかかわらず相変わらずスッ飛ばしていたスピードを、急にゆるめた。何事か！と前を注視すると、何と、牛の大群が道をいっぱいにふさいで、ゾロゾロとうごめいてやって来るではないか！こいつはおもしろい、とそちらを見続ける。バスはそろりそろりと近づいていって、牛たちの首の間に割りこむ。牛追いの男はしかし慣れたもので、あわてもせずに悠然とムチを鳴らして、彼等（いや、彼女等か！）をゆっくりと誘導する。バスはそうして少しあいた隙間にまた少し割りこむ――

こうして数分かかるようやく牛をかきわけ終ると、バスはまた一目散に駆けだし、めくるめくように丘を越え、丘を降り、丘を越えて、エルフィンの静かな町へと入っていった。

エルフィンから東南に向を変え、全体として

やや低まり、起伏も一段とおおらかになって、メドウの底に水たまりがまたチラホラと現れだした丘陵地帯を横切って、ストロークスタウンに着く。やや大きいが閑散とした、空と道ばかりが広いという感じの町だった。おじいちゃんが運転台から降りて、小さな店に入ってゆく。おやっ？と見ていると、アイスキャンデーを2つ持つて帰ってきた。そして、発車後10分ほどの間、またもや片手運転をしながらそれをしきりと頬ばっているのであった。だが、猛スピードにも彼のアクロバット運転にも、もう慣れてしまっていた。それに、次のロスコモンまでは、ストロークスタウンの西から南にかけての、アイルランドに数多いドラムリン地帯の中でもひときわ目立つその群集地帯を、バスは横切ってゆくのだ。私はちょっと微笑を彼の背中に送っただけで、すぐ窓外に眼を移した。キャヴァン西方の、ドラムリンの間という間き水を湛えたみごとな水郷地帯、ドネゴール周辺の、ゆたかな牧草地を載せて乳房の大群さながらにモコモコと盛り上がるドラムリンの里、ウエストポート付近の、クルー湾の海中にクジラの一団のように群れ浮ぶ、溺れドラムリン群など、さまざまな表情のドラムリン地帯をそれまでに見てきたが、さて、ここのそれはどんなであろう？と。

このドラムリンたちは、地形図上で想像していたのよりもことごとく平べったく、まるでジンマシンのふくらみのようであった。乳房にたとえ



写真1 キャヴァン。湖沼群の中のドラムリン



写真2 ドネゴール。農耕地の中のドラムリン

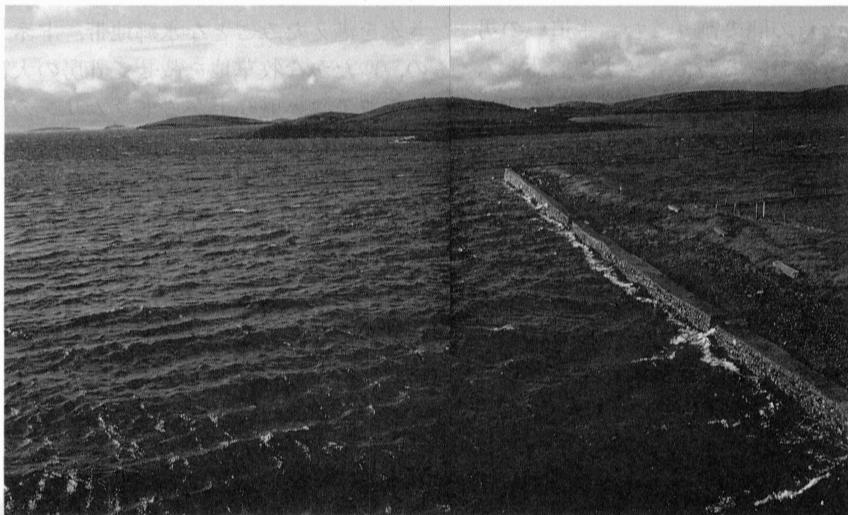


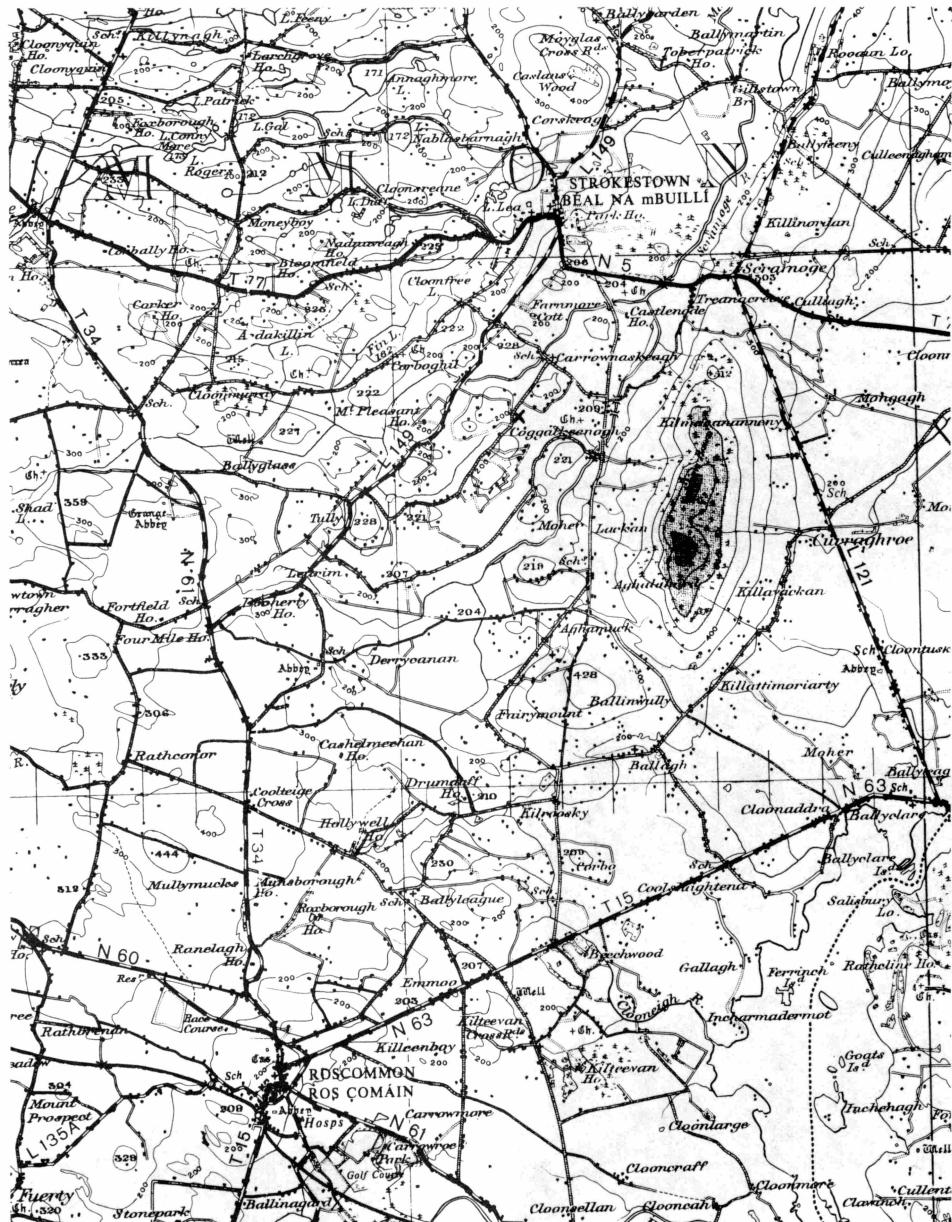
写真3 ウエストポート。海に溺れたドラムリン群

るならば、キャヴァンやドネゴールのそれがボイン型などに対してペチャパイ型。あまりに低いので1つ1つがハッキリ分離して見えず、アイルランドのナショナルアトラスの中の氷河地形分布図と1哩 $\frac{1}{2}$ 時地形図とで前もってそれと知っていたら、わずかにふくらむのっぺりと低い丘が切れ目なくつながってゆるやかに波打っている丘陵地帯としか見えなかったであろう。しかし、そのふくらみが空の下に描くカーブは、女性の身体のそれのように優しかったし、ミントグリーンの

背をスプルースグリーンのヘッジロウが格子縞に区切っているパターンも、おだやかに美しかった。ロスコモンの町へバスが入ってゆくまで、私は1つ1つ少しづつちがうそんな彼等の表情に、あかず眺め入っていたのであった。

2 ロスコモンにて

ロスコモンの見ものの1つ、1253年にできたドミニコ派の修道院は、町の南にひろがる茫茫とした草原の中で、蕭々と雨に打たれていた。



地図2 126720分の1（1マイル $\frac{1}{2}$ 図）「Longford-Roscommon」

見ものの1つ、と言ったけれども、見物客のための設備は何一つとしてなく、文字通り、いちめんの草原のただ中に黒灰色の石の廃墟が悄然と立っているだけ。その見物客も、シーズンオフのせいかもしれないが、終始私一人だけであった。

13世紀という年代や、尖頭形の窓のアーチから推して、ゴチック様式の建築なのであろうが、屋根は全く残っておらず、壁も狭い窓がズラリと並ぶ側壁の一部と大きな窓のあいた妻面の壁が3つ

ばかり残存しているだけで、崩れる前の外観を想像するのは難しかった。しかし、切妻面の頂部が鋭い三角形であることや、扶壁を全く欠いていることから、急勾配の木造屋根と簡素な外壁をもつ、アイルランドの初期キリスト教建築の素朴さを多分に止めたものだった、と考えられた。彫刻も、唯一の例外——この修道院を建てたというコナハト王オコーナーの墓の上面に載る王の遺体像と、側面の8人の武士のレリーフを除いては、少



写真4 ロスコモンの修道院廃墟

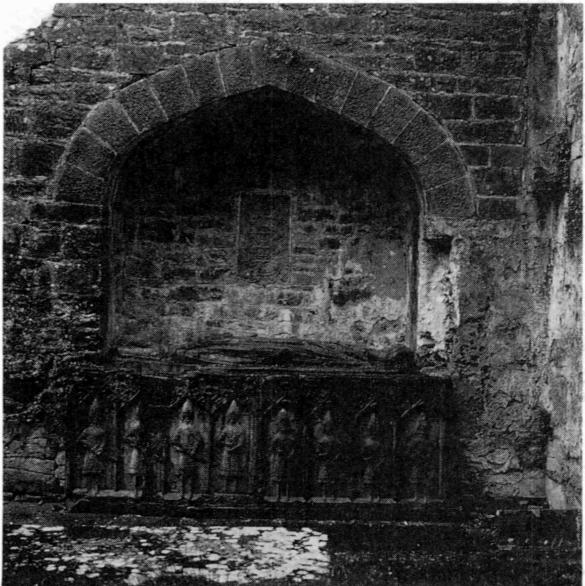


写真5 オコナー王の墓

くとも残存している部分に関する限り、ほとんど見られなかった。

そんな素朴さと、まわりの草原のわびしさと、そば降る雨の音の他は耳を打つものもない静けさとが、アイルランドの修道院が例外なしにたどった悲惨な運命を、しみじみと想わせた。といっても、この修道院の歴史についてはくわしいことは分らなかったのだが、大陸風のキリスト教のあり

方とケルト風のそれとの間の摩擦、アングロノルマンとケルトとの抗争、宗教改革・清教徒革命後のカトリック弾圧などによる幾多の波乱を経て結局荒廃していった他の修道院と、おそらく似たりよったりの運命をたどったにちがいない——少しおくれて築かれた王城が1652年にクロムウエルによって破壊されたことと考え合わせて、この修道院もやはりクロムウエルの手で廃墟にされたのかもしれない——などという想いに、廃墟の窓の1つを通して町の中の新しい教会の尖塔を望みながら、私はしばらくひたっていたのである。

しかし、降り続く秋の雨は、長いことそこに佇んでいるのには寒すぎた。歩かないとカゼをひきそうだ、と思った私は、もう1つの見どころである上記の王城を見ようと、町を通りぬけて北へ歩いていった。

ロスコモンはロスコモン州の州都だけれども、街道をはさむ1キロほどの長さの商店街の他に2筋ばかりの枝道に沿って住宅が並んでいるだけの、小さな町にすぎない。町で目立つものといえば、さっき見ていた教会と、もとは牢獄だったという4階建ての大きな石の建物だけ。廃墟にこそなってはいないが、修道院と同じように暗い黒灰色のその姿に重苦しさを感じながらその前の広場をよぎり、なお北へ300メートルほど行くと、町なみは早くも尽きて、西側にひろがってきたいち



写真6 ロスコモンの牢獄だった建物

めんのメドウの中に、城址が見えてくるのだった。

何とロスコモンとは黒ずんだ町なのか！雨のせりばかりではなかった。今歩いてきた商店街も、さすがに彩りがいくらかはあるとはいえ、やはり黒味がちのくすんだ色の建物が多かった。そしてこの城址もまた、黒灰色の巨大な石積みの残址だったのである！

ここにも見物客を迎える施設は全くなく、牛の群れ集う牧場のまん中に廃墟がどっしりと、しかしいかにもものさびしげにつつ立っているだけだった。廃墟を見るのには、牛の群れをかき分け、彼等の糞を踏まぬように用心しいしい、そろそろと行かなければならなかった。しかし、牛はいささかおそろしいけれども、廃墟の幽愁を味わうのにはこれこそがまことにふさわしい「施設」なのかもしれないな、と考えながら、おそるおそる彼等の視線をくぐってゆく。と、厚い石壁の下部にあいている門、というよりは洞窟のように暗いトンネルの中では、何と、今度は山羊の一家が雨やどりをしているではないか！突然現れた私の姿におどろいて（この時も見物客は私一人だった）ドサドサと後しさりしながらウエー、ウエー、と叫ぶ彼等に「オレは何もしやしないよ、安心しな」と笑いかけてそのトンネルをくぐる。くぐった先の中庭もまた、いちめんの草原だった。

13世紀は、9世紀からアイルランドへの侵入を

はじめたノルマン人たちが、アイルランドの王族たちと並んでアイルランドの約半分に割拠して貴族支配を行っていた時代。その貴族支配を強化・安定させるために、それまでの土壘型や天守塔型の城に代わって城壁型、すなわち四角形の中庭を囲む城壁を4隅と要所要所の塔で固めた形の城、がぞくぞく建てられた、城郭建物の黄金時代であった。アイルランド王族たちの中の幾人かも、それにならって、このノルマン形式の城をつくった。コナハト地方を支配していたオコーナー王はそのはしりであった。彼の築いたのが、このロスコモン城なのである。

14世紀から16世紀にかけては、ノルマン貴族とアイルランド貴族がともどもイギリス絶対王政の支配に反抗した。しかし彼等の間の紐帯の弱さのために、結局敗退する。そしてアイルランドは、急速にイギリスの植民地に化していったのだった。

その過程と、その後も続く政治・宗教的動乱に翻弄されながら、王城も廃墟と化していった。そして、それぞれの王城と密接に結びついていた修道院も。

石壁の中の肌寒く暗く足もとのあやうい石段を登る。苔むしてオリーブイエローを帶びたり、いちめんに鳥の糞の白い点々や斑に覆われたりしている石積みの、不気味な黒灰色に思わず身を縮め

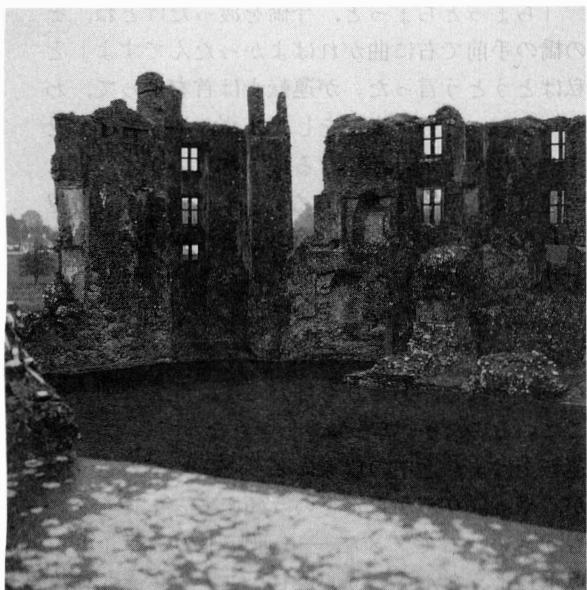


写真7 ロスコモン城にて



写真8 ロスコモン城より水びたしの牧草地を俯瞰

ながら。時折り眼に入る中庭の草のあざやかな鸚
鵡が、石の不気味さをいよいよつのらせる。あるいは階段を吹き抜け、あるいはまるで自然の洞穴の口のように輪郭がボロボロに崩れた窓を通して吹きつけてくる風が、登るにつれてはげしくなってくる。それが肌に叩きつける雨の冷たさに耐えて窓から眺める廃址——四隅の塔の残址や、内壁が崩れ去って窓のボカリポカリあいた外壁だけがそれらの塔にやっとのことで支えられて心もとなく立っている光景が、アイルランドの城たちの悲史をさまざまと想わせた。

てっぺんに立つと、そんな城の全景と、城の外の田園風景とが、一望に見わたされる。どこまでも暢びやかな牧草地と木立ちの風景——しかしそれもこの日は雨にけぶって茫とかすんでいるばかりでなく、ところどころ水田とみまがうように水に沈んで、ほの白く光っていた。そしてそれがまた、その年の多雨水害や、1840年にアイルランドの人口をほぼ半減させてしまった大飢饉など、自然災害に見舞われることも多かったこの国の歴史の悲しさを物語っているように思われるのであった。

だが、階段を降りるころから雨粒がようやく細かくなりだし、空もふんわりと明るみを増してきた。さっき入ってきた門にもどると、山羊たちは私に追われるよう外へ出ていったが、もう中に入ろうとせず、そのまま外で草を食べたり、じゃれ合ったりしはじめた。門の横からメドウへ向かって延びるヘッジの上でたわむれている仔山羊にカメラを向けたら、彼等ははじめ平行に並んでそろって首を右にかしげ、次には向かい合って首をまっすぐ立て、ポーズをとってくれた！

下手な接客施設より、この山羊たちの歓迎のほうがはるかにいい！

3 ドラムリンを越えて眺めて

翌朝、雨は止んでいたけれども、相変わらず雲がどよーん、と低かった。

ホテルにたのんで呼んでもらったタクシーの運転士に私は地図を示して、コッガルキーナッハ(Coggalkeenach)の「C」の字のすぐ上の三差路まで行ってほしいのだが、と言った。運転士は首をかしげて地図をしげしげと見たあと、「ハイ、

わかりました」とクルマを発進させたが、走りながら「途中で人にきいてみましょう」と言った。なんだ、地図がよく読めないんだ、それならオレがナビゲーターをやった方がたしかなんだがな——人に聞くとかえって間違えるぞ、と内心思ったのだけれども、客がそんなことを言って運転士のプロとしてのプライドを傷つけは悪い、といい考えてしまい、OKと返事をした。これがマズかった——

クルマははじめは間違いなく国道61号をまっすぐに北上し、4哩の家(Four Mile Ho)からL149号へ入って、ストロークスタウンへ向かった。運転士はそのへんで道端の家へ入っていって尋ねていたが、もどってくると、「2階家のところで曲がるんだそうです」というようなこと（よくは聞きとれなかった）をつぶやきながらまた走りはじめる。彼の言葉にはかまわず地図を見ていると、やがてクルマはテスリイを通りすぎた。のはいいが、そのまま228フィート標高点（以下「フィート標高点」を略して数字だけを書く）の真北の十字路も通過してしまった。そこで右折すれば指定地点に最短距離で行けるはずなのだ。しかし、まだもう一つ可能なルートがある、と思ってだまっていた。ところがクルマはそのもう一つの道へも入らずに通りすぎ、その先の橋をアッという間に渡ってしまったではないか！

「ちょっとちょっと、今橋を渡ったけどね、その橋の手前で右に曲がればよかったんですよ」と私はとうとう言った。が運転士は首を振って、わからない、という表情をしたまま、あともどりせずにクルマを走らせ続ける。これはいかん、どこへ連れて行かれるか分らない——少しぐらい遠まわりになんしても仕方がない、と、次の角でムリヤリ、ともかく右へ折れてもらった。

ところが折れた先は複雑に曲がりくねったせまい道。にもかかわらず運転士はスピードをゆるめない。それと、あせりも加わって、間もなく今どこにいるのか、見当がつかなくなってしまった。運転士はまた途中の農家に入ってきいている。だが、やっぱりわからんという顔でもどってくる。もうきいたってダメだ——運転士のプライドを尊重しようなんていう心優しいことを考えずに、はじめからオレの指図通り行け、とダンコとして

指示すればよかった——つまり、こっちが読図熟練者（？）としてのプライドをもっと堂々と發揮すればよかった、とくやんだが、アトの祭り。しかし、行く手に見えてきた山の形から、どうやら指定地点からそれほど遠くないところ、その東方の209の近くにいるらしい、と幸い見当がついたので、「ここでいいです。はじめ言ったとことちょっとちがうけど、目的にはかねますから」と、209のすぐ北の三差路とおぼしきところで降ろしてもらった。

「でも、道は分るんですか？」と彼はきく。おそまきながらここぞと、「うん、わかるよ。地図があるから大丈夫。それよりそちらは帰りの道が分るの？」と言ってやると、彼はハッと気がついて「オー！ わからないねえ！ ワッハッハ」と笑う。私も吹きだしながら「ここを右へずっと行けばいいはずだよ」と教えたたら、「ハアハア、ま、分らなくなったら人にきいて帰りますよ」と、相変わらず他人をたよりにしていた。

去ってゆくクルマにバイバイ！ と手を振り、お笑いの一幕を反芻してニヤリとしてから改めてまわりをよく見ると、そこは思った通り209の北の三差路。さっきから見えていた山はこれもそう考えた通り、ストロークスタウンの東方に北北東・南南西方向に走るナマコ形の山稜の南半部、スリーヴ・ボーンであった。

というような次第で、はじめのもくろみとはちがったルートを歩くことになってしまったけれども、ドラムリンの観察に関しては似たようなもの、むしろ、はじめの予定ルートよりはいいかも知れない（今クルマで来た道が実ははじめに歩こうと思っていた道の一部だったのだが、クルマからはドラムリンはあまりよく見えなかった——樹林に妨げられて）、と考えながら、三差路からまっすぐ北へ歩きだす。こんな出たとこ勝負も悪くはないな——

三差路の北100メートルあたりから振り返ると、209のある丘の全景が、スッポリと眼に入った。それは、曇天下にもかかわらずつやかな鸚鵡の牧草に、緑のびろうどをかぶせたように覆われ、深緑の木立ちをモワモワと載せた、整った形のドラムリン——のっぺりと這うように低くはあるけれども、ジンマシンダのペチャパイだのというにはあまりにもみごとに美しいドラムリンであった。右手にスプルースグリーンの森と淡緑のメドウのふとんをかぶって優しくなだらかに横たわるスリーヴ・ボーンを望みながら進むと、やがて道は、地図に200フィート等高線で示されているドラムリンへ登ってゆく。これはさきのドラムリンよりはるかに大きく、したがってはるかに平べったく、等高線の外側遠くまで裾を曳いていた。だから、この時は（自分がその上へ登ってしまう



写真9 スクラモージ川南岸の巨大ドラムリン

（ということもあって）全体像をつかむに至らなかつたのだが、その北でスクラモージ川を渡る前後から、西半部を見渡すことができた。すっぽりと鸚鵡の衣に覆われて、女性の腹部のような優美なスカイラインを描き、点々と載る木立ちに心にくくアクセントを添えられた、これもまたみごとに美しい丘だった。はるか西方の228のあるやや形の乱れたドラムリン（2つのドラムリンが複合したものらしい）も、同じころ、白く光る川筋の向こうに、ミントグリーンのすべらかな肌を横たえていた。

道はそのあと、今度は204のあるドラムリンへと登ってゆく。これも自分が登ってしまうので全景を見ることはできなかつたが、道の南側にその頂部が、亭々とゆたかなカシの木立ちと2階建ての堂々とした農家とを載せて、風格たっぷりに盛り上がっていた。そしてそれを降りるころ、さきの最も大きく最も平らなスクラモージ川南岸のドラムリンがもう一度、はるかにかすむスリーヴ・ボーンとその手前の、洪水で湖のようにひろがったスクラモージ川の光る水面との間に、淡いミントグリーンにのっぺりと優しく這っている姿を見てくれたのであった。

またもや降りだした雨に脚を速めてストローク・タウンの町へ入り、前日運転士のおじいちゃんがアイスキャンデーを買った店の前で、アスローン行きのバスを待つ。歩道にトランクが一つ放りっぱなしにしてあつた。ハハア、誰かもう一人バスを待つているのだな、と思っていたら、果たしておばあさんが一人やってきた。バスはそれでもなかなか来なかつた。と、彼女は私に近寄ってきて、話しかけた。「天気が悪くて、寒いですねえ」「ええ、ここのところずっと雨つきですね。いつもこんななんですか？」「いいえ、今年は特別なんですよ。6月から9月まで、100日間も雨ばっかりでね。おかげで穀物がすっかり流されてしまつて、食糧を輸入しなきゃならなかつたんですよ。テリブルな年でしたよ、ほんとに」と、彼女は何度もテリブル、テリブルと繰り返して嘆いた。ここでもまた雨の話をきくことになつたわけである。そして、ようやくやってきたバスが走つていったシャノン川の両岸の大平原の、水びたしになつた牧草地や、見渡す限り赤茶色に染まって茫茫とわびしい荒れ野などが、それをふたたびさまざまと眼に訴えたのだった。